国際研究論叢　18（1）：19～33，2004

アウシュヴィッツの特別作業班

柴　嵜　雅　子*

The *Sonderkommando* in Auschwitz

Masako Shibasaki

Abstract

In the death camps the strongest of the prisoners, mostly Jewish, were assigned the filthiest part of the genocide : running the crematoria and disposing of the corpses. The group was referred to as the *Sonderkommando* (Special Squad). Although the members were victims of the Holocaust themselves, they have often been demonized and depicted as unscrupulous wretches who lent a helping hand to the Nazis to exterminate their own people. This paper, focusing on Auschwitz, intends to offer a better understanding of these slave laborers. First, it describes their tasks, privileges and eventual fate. Then, it refutes the strictures posed by critics such as Primo Levi and Bruno Bettelheim, and points out that the men of the *Sonderkommando* had no choice but to continue their demeaning toil. Finally, this article reviews our conventional image of man, which resists embracing them as humans.

キーワード

ホロコースト、特別作業班（ゾンダーコマンド）、プリーモ・レーヴィ

Ⅰ　はじめに

ナチスは「ユダヤ人問題の最終的解決」の名の下に、ガス室を建設し、効率よくユダヤ人を殺戮して行った。基幹収容所に加えビルケナウ収容所、モノヴィッツ収容所が建設され巨大な複合収容所となったアウシュヴィッツの場合、ユダヤ人の被害者数は約100万人に上ると、ヒルバーグは推定している[1)]。100万人が死ねば、100万の死体を処理しなければならない。ナチスはもっとも「汚い」その仕事を、囚人にやらせた。当初は「焼却所作業班」、「埋蔵作業班」とも呼ばれていたが、1942年９月には死体処理に関わる組織の名称は「特別作業班（Sonderkommando）」に統一される[2)]。ＳＳは大虐殺を隠蔽するために「特別措置（Sonderbehandlung）」という語を用いたが、その後始末を強制されたのが「特別作業班」というわけである。

＊しばさき　まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2004.6.4受理〉

この組織に配属させられた者の中には、ポーランド人やドイツ人やロシア人もいるが、圧倒的多数をユダヤ人が占める。そのため特別作業班は、ＳＳの手先となって同胞の絶滅に協力したとして、しばしば悪魔のように描かれる。しかし真実はどうなのだろうか。トレブリンカ、ソビブル、ヘウムノ、ベウジェッツといった絶滅収容所にも特別作業班は設置されていたが、本稿では比較的資料の多いアウシュヴィッツに限定して、ホロコーストの中でももっとも悲惨と思われる特別作業班について論じることにする。まず、特別作業班の実態を明らかにする。次にブルーノ・ベッテルハイムやプリーモ・レーヴィらが行なった特別作業班に対する批判を取り上げ、そこに潜む誤解や偏見を提示する。最後に、特別作業班批判の裏にある人間観について考察する。

Ⅱ　特別作業班の実態

１）作業内容

「特別作業班」と一括りにされているが、その仕事内容はユダヤ人の虐殺の過程に応じて、いくつかの種類に分かれている。まずユダヤ人をガス室に入れる前に、着ているものを脱がせ腕時計や眼鏡などを取らなければならない。さもないとそれらの品が汚損されて、ドイツに送って活用できなくなってしまうからである。その際、初めはＳＳ隊員の命令という強圧的方法が採られたが、やがてパニックや反乱を起こすのを防ぐ狡猾で効率的な方法が編み出された。囚人を「脱衣室」に導き、シャワーを浴びるために裸になれと命じたのである。だがユダヤ人の中にはドイツ語が分からない者も多い。何と言ってもナチスはヨーロッパ中のユダヤ人をかき集めて、殺害していったのである。アウシュヴィッツに移送されてきたユダヤ人の出身地は、地元のポーランドのみならず、ハンガリー、ギリシア、フランス、イタリアなど広範囲にわたる。そのためＳＳ隊員は、犠牲者と同じ言葉を話せる特別作業班のメンバーを起用した。彼らは脱衣室で不安を感じている人にはやさしく声をかけ、服を脱ぐのに手間取る高齢者や障害者には手も貸した。

犠牲者たちが裸体になってガス室に入ると、ドアが閉じられ、中の明かりが消される。すると、これまたカモフラージュのために国際赤十字と記された車から、ＳＳ将校と衛生兵が出て来て、缶入りのチクロンＢを流し込む。約５分で中にいた人は死亡するが、扉が開けられるのは20分たってからである。ガスは換気装置で室外に排出されるが、少しは残留しているので、ガスマスクを付けた特別作業班のメンバーが中に入る。そして神経を参らせるような仕事が始まる。死者たちは綺麗に並んで横たわってはいないからである。シアンガスは空気より重いため、部屋に閉じ込められた人々は清浄な空気がまだ残る上方へ行こうとして、本能的にもがき争う。そのため死体は互いに絡み合い、力の強い者を頂点としたピラミッド状をなしているのである。医師として特別作業班に属していたミクロス・ニスリは、死体を扱いなれた検死の専門家らしく、淡々とその情景を描いている。「特別作業班はゴム長靴を履き、死体の山を取り囲み、猛烈な勢いで放水する。溺死者やガスで死んだ人がする最後の行為は、不随意的排便だからだ。どの死体にも汚物が付着しているので、洗い流さなければならないのである。死体の『水浴』が終わると――特別作業班はこの仕事をするとき、自ら進んで非人格化し、ひどい心労を感じている――、雑然

と一塊になった死体の分離が始まる」[3]。

苦労して一体ずつに分離された死体は焼却炉の前にまで運ばれるが、焼かれる前に特別作業班の中の「死体理髪師」が女性の髪の毛を切り取り、「抜歯係」が金歯を抜き取る。死者を完全に物として扱う「死の工場」では、ひたすら効率化が推進される。「作業過程を完璧にして行く中で、1～2名の男性を2～3名の女性と一緒に燃やすと焼却がもっとも速く進む事が判明したので、この原理にしたがって男性と女性の死体が焼却炉の前に並べられた。その理由は、男性より女性の体の方が、脂肪の占める割合が大きいからである」[4]。さらに焼却炉に死体を入れた後も、工夫がほどこされる。「15分ほどすると炉の扉を少し開けて、焼却のスピードを上げるために鉄製の熊手で死体を引っ掻き回すのである」[5]。ビルケナウの四つの焼却所が完成する前、またその後でも殺害者数が多すぎて焼却炉では足りないときは、地面に穴を掘って死体を燃やすこともあった。そういう場合、「まきの山から溶けて流れ出した人間の脂肪を、特別作業班の囚人は死体がよく焼けるよう、注ぎかけなければならなかった」[6]。ガス室や焼却の段階で、特別作業班員が変わり果てた姿の家族と再会することもある。

死体を燃やせば灰が残る。灰を埋めたり、近くのヴィスワ川かゾーラ川まで運んで捨てたりするのも、特別作業班の仕事である。このように、囚人が服を脱いでガス室に入るところから灰となって消えて行くまでの一連の工程が、特別作業班に割り当てられたのである。その他に、射殺の補助をさせられることもあった。ナチスは大人数のユダヤ人を一挙に殺害するのにはガス室を使ったが、それほど大掛かりでない場合には、拳銃でうなじを撃ちぬき、溝に投げ込んで焼くといった方法も採った。そんな場合に特別作業班員は、SS隊員が射殺しやすいように囚人を支える役目をやらされたのである。ユダヤ人虐殺の秘密に通じた特別作業班員は、病気になったりけがをしたりしても通常の病棟に入れるわけにはいかないので、ニスリのように専属の医師が特別作業班にメンバーとして所属していた。特にニスリの場合はメンゲレに見込まれ、治療以外に数々の検死もすることになった。

特別作業班に配属される者は、最初はすでに収容されている囚人の中から選ばれていた。その際、収容所所長のシュヴァルツフーバーは、強壮な体つきだけでなく「人相」も注意深く見て、過酷な仕事に耐えられる隊員を選び出したという[7]。後にはバラックに収容する前に、移送列車がアウシュヴィッツに到着するや否や、若くて強健な男性が選び出された。ユダヤ人を家畜扱いした移送は、食物や水や排泄場所もないまま、しばしば数日間にわたり、途中で絶命する者も出るため、アウシュヴィッツに着く頃には、生き残った者も茫然としている。こうした判断力の低下したときに特別作業を始めさせた方が、凄惨な仕事に順応しやすいというわけである。また例外的に、脱走した罰として特別作業班に回された囚人もいる。1942年から1945年まで特別作業班に所属した囚人の総数は、およそ2100人[8]だが、実際に動員された数は短期間に集中している。ハンガリー系ユダヤ人の虐殺が始まったピーク時には、メンバーの数は952人を数えたという[9]。

2）特権

特別作業班員は普通の囚人より多くの食料を与えられ、囚人服ではなく平服を着ることが許されていた。これらはいわば正式の特権である。さらに彼らが犠牲者の所持品をくすねても、ＳＳ隊員は大目に見ていた。この非公式の特権の持つ意義は大きい。移送されてきたユダヤ人は、旅のための食料はもちろん、貴重品もできるだけ持ってきていた。そのおかげで特別作業班のメンバーはまず、他の囚人のように飢える心配がなかった。ニスリは焼却所の２階にある特別作業班の部屋で初めて食事をしたときのことを、次のように描いている。「私たちを待ち受けるテーブルには、分厚い絹製の錦のテーブルクロスがかけられ、美しいイニシャル入りの磁器の皿や銀製のナイフとフォークの他、移送されて来た人のかつての所持品が並んでいた。テーブルに山のように積まれた食べ物はすべて、移送された人々が定かでない将来のために持参できたようなもので、種々の保存食品、ベーコン、ジャム、何種類かのサラミ、ケーキ、チョコレートだった」[10]。もちろん酒やタバコもふんだんにある。普通の囚人が栄養失調のために痩せさらばえ、「回教徒」となって人間の尊厳を失って行ったのに対し、特別作業班のメンバーは、少なくとも外見上は人間の風貌を保つことができたのである。

だが彼らは、自分たちの腹を膨らませるためだけに特権を利用したわけではない。タバコや酒、さらに金やダイヤモンドや貨幣を利用してＳＳを買収し、収容所の外からも様々なものを入手した。ニスリがいた焼却所にはナチ党の新聞、「フェルキッシャー・ベオーバハター」が毎日、闇ルートで届いていた[11]。また女性収容所のために、外科手術器具一式を揃えた特別作業班員もいたという[12]。ガス室の犠牲者が残した貴重品を活用したからこそ、特別作業班はポーランドのレジスタンス運動から武器を調達したり、火薬製造工場で働く囚人と連絡を取ったりして、1944年10月、アウシュヴィッツで唯一の反乱を起こすことができたのである。

さらに収容所の実態を記録した文書を地下に埋めて後世に残せたのも、特別作業班の特権をうまく利用したからである。たとえばＬ・ラングフースが1944年、保存瓶に入れて焼却所の敷地内に埋めた報告書は、彼の死後、1945年４月に発見された[13]。ザルメン・レーヴェンタールが1944年に書き残した36枚の文書は、1962年に第三焼却所から掘り出されたとき、湿気のために大部分が判読不能になっていたが、それでも特別作業班の詳細を伝えてくれている。文書だけでなく、アルベルト・エレラは焼却所に隠していた写真機で、虐殺の証拠写真を撮ることにも成功した。その写真は1944年９月には、ポーランドにおける抵抗運動の組織の手に渡っている[14]。彼らはユダヤ人絶滅作戦の生き証人として、自分たちこそ証言を残さなければならないという切迫した思いを持っていた。殺されてしまったユダヤ人はもはや語ることができないし、一般の囚人はガス室や焼却所で何が起きているか、正確には知りえないからである。ザルメン・グラドフスキは1943年の秋から１年にわたって書いた日誌を埋めるとき、手紙を添えた。そこには彼のような記録者の切実な願いが綴られている。「親愛なる発見者の方。くまなく探してください。地中には私や他の人が書いた10種類の文書が埋められています。それらはここで起きたことを明らかにしてくれます。それから大量の歯もここには埋まっています。私たち特別作業班のメンバーはで

きるだけたくさんの歯を、特にこの敷地に撒きました。何百万人の物的証拠を世間の人が見つけられるようにするためです。私たち自身は、解放の瞬間を味わえるという望みをすでに捨てました。[中略] 私のメモを手がかりに、後世の人々が私たちに対する判断を下されますように。私たちが生きてきたこの悲劇的な世界のせめてほんの一片だけでも、世間の人々が見出しますように」[15]。

3）秘密保持者

一般の囚人とは異なり飢餓に苦しむ必要がなかったとはいえ、特別作業班員もあくまで囚人であり、命令には絶対服従が要求された。そもそも一旦、特別作業班に配属されれば、仕事を止めることは死を意味した。実際、1944年7月、「特別作業」を拒否したコルフ出身のユダヤ人たちは、すぐにガス室へ送られた[16]。また秘密保持の鉄則を破って脱衣室でそっとガス室の実態を告げたある班員は、それに気づいたＳＳによって生きたまま焼却炉に放り込まれたという[17]。

命令通りに仕事をこなす特別作業班員にしても、ユダヤ人大虐殺の実態をつぶさに知っている以上、ＳＳにとっては決して生かしてはおけない存在だった。ナチスはユダヤ人の絶滅を、外部には隠そうと細心の注意を払っていた。「ユダヤ人問題の最終的解決」や「特別措置」といった隠語を使ったのも、また移送された人は殺害されていないことを示す証拠として「家族収容所」を設置したのも、世界の目を欺くためである。こうした隠蔽作戦を無にする力を持っていた特別作業班を、ＳＳは周到に粛清していった。たとえばビルケナウで初めて結成された特別作業班は、所属する何人かの囚人が逃亡を企てたことが発覚したため、メンバー全員が殺された[18]。その後も、特別作業班の「寿命」は長くて4ヶ月であり、医師や火夫のような特殊技能を持った例外を除いて、メンバーは一斉に殺害された。新たに特別作業班に配属された囚人の最初の仕事は、先代の作業班員の焼却なのである。

そのためＳＳは、特別作業班に所属していた囚人は全員死んだと思い込んでいた。アウシュヴィッツ裁判で、かつて特別作業班のメンバーだったミルトン・ブキが証言をしたとき、被告のオズヴァルト・カドゥクＳＳ伍長は、そのような証人の存在を否定した。「特別作業班のメンバーだったというこの証人が、アウシュヴィッツを生き延びたというのは、私にはありえないと思われます。特別作業班員が時々、一人残らず殺されたことを私ははっきり知っています。ですから特別作業班からは誰も残っていません。管理する立場の囚人も殺害されましたから」[19]。ＳＳの思惑とは異なり、アウシュヴィッツ収容所からの撤退が始まったとき、混乱の中で普通の囚人に紛れ込んで辛くも生き延びた元特別作業班員はいる。ただその数は、特別作業班に配属された2100名中、およそ100名に過ぎない[20]。

Ⅲ　特別作業班に対する批判

1）囚人

同じナチスの犠牲者とはいえ、特別作業班員は普通の囚人からは悪魔かＳＳの手先のように忌避されていた。たとえば、「あれはもう人間の顔ではありませんでした。引きつっ

て、正気を失った顔でした」、「特別作業班、それは酔っ払ったユダヤ人で、死へと赴く同胞をＳＳ隊員と変わらぬ手荒さで扱った」といった手厳しい声が上がっている[21]。ただし通常の囚人の批判は、ある程度割り引いて理解する必要がある。ＳＳは秘密保持者である特別作業班員が周囲と接触しないようにしていたので、通常の囚人は特別作業班について直接詳しく知ることができなかったからである。一般の囚人の印象は、単なる風聞によって歪曲された可能性が大きい。また、飢えに苦しむ彼らにとって、痩せてもいない特別作業班員はそれだけで怨恨の対象となり、悪い噂に尾ひれがつくこともあっただろう。特にユダヤ人の場合、復活の信仰に基づき土葬が慣例となっているので、肉体を燃やし尽くしてしまうことに対する忌避感が、死体の焼却に当った班員に投影された可能性も考慮に入れなければならない。

もっとも、一般の囚人だけでなく、特別作業班のメンバー自身からも同様の批判がある。たとえば医師として特別作業班に属していたジギスムント・ベンデルは、死体処理に携わっていた仲間について、「私が知っている連中は、サロニキ出身の教養ある弁護士や、ブダペストから来たエンジニアなどだが、もはや人間らしさを失っていた。彼らは本当に悪魔だ」と語っている[22]。レーヴェンタールが後世のために隠した文書でも、「私はここで真実を語らなければならない。このグループの何人かは時とともに私たち自身恥じ入るほかないほど、ひどく自失してしまったのである」と書かれている[23]。特別作業班の仕事を考えれば、メンバーの何人かが理性的判断力を失い、野卑な獣性を発揮したとしても、不思議ではない。そもそも同じユダヤ人といっても、アウシュヴィッツに集められた者は、国籍はもちろんのこと、受けた教育や性格も千差万別である。特別作業班以外でも、同じ囚人をＳＳ以上に残酷に扱ったユダヤ人のカポーは少なくなかった。収容所の外でも、自分の利益のために仲間を殺したり、幼い子どもを虐待したりする人は存在する。特別作業班のメンバーが語った次の言葉が、端的に彼らの本質を要約していると思われる。「特別作業班の連中は怪物だと思っているんでしょう。でもそうじゃない。他の人たちと変わりはない。ただ、ずっと不幸なだけなんだ」[24]。

２）ルードルフ・ヘス

チクロンＢを導入した収容所所長として悪名高いルードルフ・ヘスは、特別作業班を次のように描写している。「彼らは、犠牲者たちに待ち受ける運命を一言も告げなかったばかりでなく、脱衣の時はせっせと手助けをし、逆らう者たちは力ずくでも服を脱がせた。また、動揺する者を連れ去り、射殺の際には、しっかりと押えることまでやった。さらに、彼らは、銃を構える下級隊長たちが目に入らないように、犠牲者たちを連れてきたので、その下級隊長は、人目につかずに、頸筋に銃をあてることができた。また、彼らは、ガス室の中へ運びこめないような病人や衰弱した者たちにも、同じような処理の仕方をした。まるで、自分自身が殺す側に属しているかのような自然さだった」[25]。これでは特別作業班員がＳＳの従順な手下となり、嬉々として仕事をこなしているように聞こえるが、事実はそうではない。医師だったニスリによると、特別作業班員は「神経障害の一般的傾向」があり、自らの確実な死を意識しながら大量の同胞の死体を処理する結果、「急性の抑鬱

症や、しばしば神経衰弱」を起こす[26]。また、ニスリに自殺の薬を求める者も後を絶たなかったという。

ヘスは単に特別作業班員の心のうちが見えていなかっただけでなく、この無理解には自己正当化の心理的メカニズムも働いている。レイプを犯していながら、被害にあった女性が派手な服装をしていたからだと嘯く犯人のように、犯罪者が自らの悪行を棚に上げて、被害者に非があったかのような言い方をすることはよくある。ヘスも意図的あるいは無意識的に、虐殺に対する自らの責任を軽くしようとして、囚人自身に責任があるかのような捉え方をしたと考えられる。いずれにせよ、特別作業班員は決して「自然」にＳＳを助けたわけではないし、「殺す側に属して」もいないのである。

ヘスは特別作業班について、「私は、彼らを十分に観察する機会をもったが、本当の所、彼らの態度の理由をきわめることはできなかった。ユダヤ人の生と死は、私にはついに解くことのできない謎であった」とも語っている[27]。ここでも彼はユダヤ人蔑視ゆえに事実誤認を犯している。「身の毛もよだつ仕事を夜に日について」[28]できるのは、決してユダヤ人だけではないからである。特別作業班の中にはユダヤ人のみならず、ポーランド人やロシア兵も混じっていた。またごく普通のアメリカ人が、権威者に命令され責任を免除されれば、罪もない人に致死的な電気ショックを与えてしまうことを、すでにミルグラムの実験は明らかにしている[29]。ましてや特別作業班のように、従わなければ死という極限の条件下でなら、どこの国の人間であれ、ほとんどが命令に従っただろう。

3）ブルーノ・ベッテルハイム

ミクロス・ニスリが書いた『アウシュヴィッツ――ある医師の目撃証言』の英訳が1960年に出版されたとき、ブルーノ・ベッテルハイムが序文を寄せている。同じ年にベッテルハイムは、強制収容所における人間の心理をテーマとした『鍛えられた心』も刊行している。彼自身、1938年から39年、約１年間ダッハウとブーヘンヴァルトの収容所を体験したためかもしれないが、ベッテルハイムは、抵抗もせずに殺されるがままになっていたユダヤ人に対して、非常に手厳しい批判をしていた。それはよく言われるユダヤ人の自己憎悪ではなく、彼らが置かれていた状況に対する無理解に起因するように思える。

ベッテルハイムにとって、ニスリだけでなく特別作業班員はみな、「生きながらえるためにＳＳの道具となることを志願した強制収容所の囚人」[30]に他ならない。特に、ニスリが随所で見せる優れた医師としてのプライドを指弾し、倫理に暗いまま技能と識見にこうしたプライドを持ったために、ナチスドイツでは優秀な学者が人体実験や疑似科学の研究に手を染めたとベッテルハイムは主張する。その際、彼は「ニスリ博士やメンゲレ博士やその他もっと傑出した何百人もの医者」[31]と、ニスリとメンゲレを完全に同列において論じている。

ここでベッテルハイムが犯した誤解ないし曲解を二点、指摘しなければならない。まず、特別作業班員は決して「志願」などしていない。何をするかも知らずに放り込まれた先が特別作業班であり、ＳＳの怒号と棍棒に追い立てられて死体処理を始めさせられたのである。食べ物や酒といった特権が与えられることなど知る由もない。続けなければ殺される

ような行動をとることは、「志願」でも「同意」でもない。ニスリにしても、病理学の経験のある医師は申し出ろと命じられたときに、何をするかも知らずに応じただけである。メンゲレの人体実験に協力したいと志願したわけではない。

第二に、ニスリは人体実験に関わったにしても、囚人に危険な薬剤を投与したわけではないし、病気にわざと感染させてもいない。彼の仕事は主として検死なのである。時には死因不明のＳＳ隊員の死体の解剖も任されている。「３年間ボロスロ法医学研究所で過ごし、そこではありとあらゆる方法で自殺した死体について研究する機会があった」[32] ニスリにとって、不審な死体の解剖は慣れ親しんだ仕事に過ぎない。ニスリ自身が1945年夏の宣誓証言で明らかにしたように[33]、メンゲレは実験目的で双生児を同時に殺したり、実験後、不要になった「モルモット」の囚人を殺害したりしたが、ニスリは他の特別作業班員と同様、直接、人を殺すことはしていない。

医師の職業倫理に反したとニスリを弾劾するベッテルハイムは、『夜と霧』で有名な精神科医、フランクルを引き合いに出す。「フランクル博士は収容されていた間、強制収容所の囚人としての自らの体験にどんな意味があるのかを絶えず求め続け、自分自身の人生だけでなく人生一般のより深い意味を見つけ出した。他の囚人たちはニスリ博士のように、単に生き残ることにしか関心がなく、たとえその結果、ＳＳ医が実施した非道な人体実験を手伝うことになったとしても意に介さず、おぞましい体験から深遠な意味を得ることもなかった。かくして彼らは肉体的には生きながらえたが、自責の念と悪夢のような思い出に苛まれるのである」[34]。しかしフランクルを持ち出すなら、私たちが考えるべきなのは、「もし特別作業班に配属されていたなら、フランクルはどうしたか」という問いだろう。彼が死体処理や検死を拒否して死を選んだとは思えない。フランクルは移送される以前からウィーンで自殺防止の運動を繰り広げ、収容所内でも仲間の囚人に、苦しくても勇気と誇りを持って生き続けることに意味があると訴えていたからである[35]。彼なら、ＳＳに強いられた作業を耐え忍ぶことにも意味を見出し、生き続けることを選んだのではないだろうか。

４）『灰の記憶』

2001年、ティム・ブレイク・ネルソン監督は、ニスリの『アウシュヴィッツ――医師による目撃証言』を元にした映画、〈The Grey Zone〉を発表した。この題は、次節で論じるプリーモ・レーヴィの用語を借りたものだろう。日本でも2003年に『灰の記憶』というタイトルで公開され、「文部科学省選定作品」となっている。ホロコーストの中でも余り注目を浴びることのない特別作業班と、彼らが実行したアウシュヴィッツで唯一の反乱を取り上げて映画化した点は、高く評価できるだろう。ただ、医師のニスリの描き方に関しては、ベッテルハイムと同様の偏見や誤解に基づいた創作が目に付く。そこには私たちの固定観念が反省されないまま映し出されていると思われるので、原著と映画版との落差が激しい箇所を三つ挙げておこう。

まず、ニスリがようやく収容所で見つけ出した妻と娘に、自分がしていることを言うか言わないかという点である。『アウシュヴィッツ』では、妻にどんな仕事をしているのか

を尋ねられたニスリはすんなり「メンゲレ博士の助手で、そういう身分で特別作業班に所属している」[36] と説明する。もちろん特別作業班の噂を知っている妻と娘は仰天するが、彼は悪びれる風もなく、翌日も会いに来ることを約束する。ところが映画では、実験室で仕事中のニスリにＳＳ軍曹が妻子について問いかけ、以下のような会話が交わされる。

ＳＳ軍曹：ここで何をしているか、奥さんと娘に話したのか？
ニスリ：まさか、そんなことはしませんよ。
ＳＳ軍曹：何か察していたかね。
ニスリ：当然でしょ。みんな噂してますから。
ＳＳ軍曹：君は噂を否定したんだね。
ニスリ：ええ、違うといいました。

つまり、ニスリ自身の解釈とは異なり、映画では彼の仕事が、妻子にはとても言えないような悪事として描写されているのである。そこでは一般人が死体解剖に対して抱く陰惨なイメージも、一役買っているかもしれない。

同様の齟齬は、また別のシーンでも見出せる。特別作業班員の蜂起が失敗した後、ニスリ自身の記録ではメンゲレが現われ、反乱には一切関与していないと自ら釈明したニスリは銃殺を免れる。もちろん、生き残ったからといって無邪気に喜んでいたわけではない。「命を落とさずに済んだものの、私は慰めも喜びも感じなかった。執行猶予に過ぎないことは分かっていたからだ」[37]。さらに、自尊と自嘲をこめて、「さしあたり、私は不可欠の存在である。この収容所には、メンゲレの要求を満たせる外科医は私以外にいない。たとえいたとしても、注意深く医者であることを隠し、専門的技能があることを人に言わないだろう。なぜなら、そんなことをすればメンゲレ博士の手中に陥り、命に終止符を打つことになるからだ。つまり、特別作業班のすべてのメンバーと同じく、寿命が４ヶ月に限られてしまうのだ」とも語る[38]。ここから分かるように、ニスリがメンゲレの助手になることを忌避する理由は、人体実験に関わるからではなく、機密に通じた人間としてナチスが絶対に生かしておかないからなのである。この自己理解に異議を唱えることはもちろんできる。犯罪への関与を隠蔽する自己正当化だと批判することもできるだろう。ただ、ニスリ自身が罪の意識を持っていなかったことは確かである。メンゲレへの協力を犯罪と捉え、自責の念に苛まれていたなら、解放後それほど時を経ずして収容所の体験を公になどしなかっただろう。だが『灰の記憶』では、そんなニスリの真意とは裏腹に「物語」が展開する。ニスリのところにＳＳ軍曹がやって来て、お前は暴動には無関係だとメンゲレに取り成したから、これまで通り仕事を続けろと命じる。殺されることを半ば期待していたようなニスリはそれを聞き、続けなければならない仕事のおぞましさを思ってか、激しく嘔吐する。つまり、ここでもニスリの仕事は、唾棄すべき犯罪として捉えられているのである。

原著と映画の相違に関して、妻子を救うためにニスリが取った行動を最後に挙げておこう。妻と娘が収容されているバラックの囚人は２週間以内に殺害されるという情報を入手

した彼は、強制労働を管理している部署に自ら赴き、タバコ100本を賄賂に使って妻子を工場に配属してもらうよう手配する。これはもちろん、ニスリが収容所内の移動許可書をメンゲレからもらっていたからこそ可能になった裏技ではあるが、家族の命を救うために特権を活かした行動は、決して批判される筋のものではない。だが映画では、囚人たちが計画している暴動の情報を提供する代償として、妻子を救う方法をＳＳ軍曹に教えてもらっている。つまりニスリは、家族を助けるために仲間を売る裏切り者として描かれているのである。

ホロコーストに限らず史実を映画化する場合、観客に受け入れやすい「物語」の虚構が不可欠だろう。『灰の記憶』の場合、そうした虚構は登場人物の心理的葛藤をより劇的なものにする効果があるかもしれない。しかし印象的な「物語」は、「死体解剖はいかがわしい」、「メンゲレに協力した奴は悪者」と言った私たちの偏見に支えられると同時に、このような紋切り型の先入観を強化することも忘れてはならない。

5）プリーモ・レーヴィ

文字通りアウシュヴィッツの生き残りであるプリーモ・レーヴィによる批判は、本来なら１）の「囚人」で取り上げるべきものである。彼はあくまでモノヴィッツ（アウシュヴィッツⅢ）で強制労働に従事した一囚人であって、特別作業班の実態を直接、見聞きしてはいない。彼が著した『アウシュヴィッツは終わらない』には、こう付記されている。「この本には、アウシュヴィッツの大虐殺の数字が出てこないし、ガス室や焼却炉の模様が描かれていないことに気づかれたことだろう。ラーゲルにいた時、私はこうした事実を知らなかった。あとになって、世界中が知った時に、私も知ったのだ」[39]。しかし彼はその著書、『溺れるものと救われるもの』の「灰色の領域」と題された章の中で、あえて特別作業班の問題を取り上げ、彼ならではの考察を加えているので、他の囚人とは別に一節を設けることにした。

「灰色の領域」とは、まさに白とも黒ともつかない人間、犠牲者とも迫害者とも言い切れない人々のことである。アウシュヴィッツでは犠牲者が迫害に手を貸すような場合もあり、善悪の単純な二分を嘲笑するような情景が展開した。囚人がみな清廉潔白で無辜の義人というわけではなかったのである。灰色の領域に属する囚人の中でレーヴィをもっとも当惑させたのが、特別作業班である。この組織に属した人々について、彼はあくまで判断保留を強調する。「繰り返しておこう。ラーゲルの体験を知っているものも、ましてそれを知らないものも、だれも彼らを裁く権利はない、と私は確信している」[40]。「彼らの歴史は、慈悲と厳密さをもって考察されるべきだが、彼らへの判断は停止されるべきである」[41]。しかし、特別作業班の考察に「慈悲」が必要だという指摘からも分かるように、レーヴィの論述は随所で、特別作業班に対する嫌悪と軽蔑を覗かせている。

たとえば彼は特別作業班を、もはや人間性を失った獣の集団として描いている。特別作業班に所属する囚人は「即座の死よりも、あと何週間かの生を選んだ」「虐殺の惨めな人足」[42]、「アルコールと日々の虐殺で野獣化していた奴隷たち」[43]であり、「焼却炉の烏」[44]と揶揄される存在に他ならない。また特別作業班の存在が示唆するのは、「我々はおまえ

たちの肉体だけではなく、魂も破壊することができる、我々がもう自分の魂を破壊したように」[45] というナチスのメッセージだと言う。逆に言うとレーヴィにとって、特別作業班員は魂を破壊された人非人なのである。

さらに彼は特別作業班とＳＳが「押し付けの共犯関係の汚れた絆で結ばれている」[46] と主張し、それを如実に示す例としてニスリが伝えた次のようなエピソードを指摘する。「夕食には早すぎたので、特別作業班がサッカーボールを持ち出した。二つのチームが運動場に並んだ。〈ＳＳ対ＳＫ〉だ。運動場の一方には焼却所の監視に当っているＳＳが並び、もう一方には特別作業班が並んだ。プレーボール。大きな笑い声が中庭に響く。見ているものも興奮し、選手に頑張れと叫ぶ。まるでどこかの平和な街の運動場のようだ」[47]。ここからレーヴィはＳＳの「悪魔的な笑い」[48] を読み取る。「我々はお前たちを抱擁し、腐敗させ、我々とともに底まで引きずっていった。おまえたちは我々と同じだ、誇り高きおまえたちよ。我々と同じように、おまえたちの血で汚れている。おまえたちもまた、我々と同じように、カインと同じように、兄弟を殺した。さあ、来るがいい、一緒に試合をしよう」[49]。

これをレーヴィならではの穿った解釈ととる向きもあるかもしれないが、私自身は深読みのし過ぎと考えている。そもそもＳＳは自分たちの手が「血で汚れている」とは思っていない。少なくとも彼らの自己理解においては、ユダヤ人の殺害は「正義」なのである。ましてや一緒にサッカーをすることが共謀の印だというのは、ＳＳだけでなく特別作業班員の想像も超えるだろう。このサッカーゲームは、仕事でよく一緒になる面々が暇な時間に楽しみを共有した、という単純なことに過ぎないと思われる。『ホロコーストを読む』で斬新な解釈を提示しているインガ・クレンディネンも、このエピソードに関してレーヴィに異議を申し立てている。「彼が何を言いたいのか、なぜ彼がそのように感じるのかは理解できる。しかし、このゲームを別様に読むことも可能である。つまり、ほんのわずかの間とはいえ、ＳＳと特別作業班員は同じ人間として互いを認め合うことができた、とも取れるのである」[50]。特別作業班とＳＳがひと時の間ともにゲームに打ち興じたからといって、囚人と看守の関係が崩れるはずもなく、もしゲームの途中で特別作業班の誰かが収容所を抜け出そうとしたなら、ＳＳ隊員はすぐさま撃ち殺しただろう。

プリーモ・レーヴィはまるで特別作業班がＳＳの手下、ユダヤ人絶滅の共犯者であるかのように描いているが、それは正確な事実把握とは言えない。確かに特別作業班は、虐殺に関わる仕事の一端を担った。だが、彼らの仕事は基本的にはすでに殺された死体の処理であって、殺人でも過失致死でもない。もちろん、ガスで殺されることを知っていながら、脱衣場でシャワーを浴びると説明するのは詐欺である。しかし真実を明かして混乱を起こしても、殺されることに変わりはなく、その手段がガスか銃撃かの差しかない。殺した後で髪の毛を切ったり金歯を抜いたりするのは死体損壊に当るが、虐殺ではない。殺人にもっとも近いのは、ＳＳ隊員がうなじを過たず撃ち抜けるよう囚人を押さえておく作業で、これは殺人幇助とみなされるだろう。しかしこうした罪名は、特別作業班の行為を表面的に見て付けたものに過ぎない。なぜならガス室に送られる人を騙すことも、死体から金歯や毛髪を取ることも、射殺の補助をすることも、それ自身が彼らの目的ではなく、いずれ

の場合も真の目的は自分が殺されないように身を守ることだからである。つまり特別作業班は自らの命を守るために正当防衛に出たに過ぎない。それゆえユダヤ人の殺戮を意図したＳＳとの「共犯」関係など、成立しえないのである。

レーヴィが特別作業班を蔑むのは、実はそのような「正当防衛」を疑問視しているからである。彼は特別作業班について、「なぜ彼らはその任務を受け入れたのだろうか。なぜ反乱を起こさなかったのか、なぜ死を選ばなかったのだろうか」[51] という疑問を突きつける。この疑問を裏返せば、人間なら特別作業班の仕事などを引き受けるより、死を選ぶべき、あるいは死を選ぶはずだ、という主張になる。しかし実際には特別作業を強制された人の大半が、反抗も自殺もせず黙々と仕事を続けた。そうした人々はレーヴィの言うような人非人ではなく、ごく普通の平均的人間に過ぎない。それゆえ私たちは彼の問いを反転させ、生命を賭けて拒んだ人たちについて、「なぜ彼らはその任務を拒絶できたのか。なぜ反乱を起こせたのか、なぜ死を選べたのだろうか」と問うべきなのである。たとえばコルフ島出身のユダヤ人435人は、特別作業を一致団結して拒否し、そのため殺害された。これはおそらく同郷ゆえの連帯がもたらした僥倖と呼べるだろう。というのも、「特別作業班所属の囚人は、出身国や話す言葉によってまずいくつかの下位グループに分かれていて」[52]、そもそも「一致団結」は困難だったからである。

また、特別作業を続けるぐらいなら死を選べと言っても、囚人の自殺はＳＳにとって反抗を意味するため、一人が作業を嫌がって自殺をすれば、その罰として大勢の仲間が殺されかねなかった[53]。強制収容所では、自殺は殺人になりうるのである。そもそも自殺は、したいと思えば誰でもできるのだろうか。頭では死にたいと思っていても、体は勝手に死体の処理を続けて行くことも起こりうるのではないだろうか。さらに通常の囚人と同様、いやそれ以上に、証言者として生き残りたいと望む者が特別作業班の中にいたとしても、不思議ではない。たとえばあるメンバーは次のように語っている。「もちろん少なからぬ仲間がやったように、電線に向かって走ることもできた。でも、僕は生きたかったんだ！もしかしたら奇跡が起きるかもしれない。今日か明日、解放されるかもしれない。そうしたら復讐するんだ。僕は奴らの犯罪を直接この目で見たんだから」[54]。

こうした言葉や、「この仕事をするには、初めの日に気が狂うか、それともそれに慣れるかだ」といった元特別作業班員の発言を引用しながらも、レーヴィは文字通りに受け取らず、「自らを正当化し、自らを回復する努力のようなものでしかない」と冷ややかに言い放つ[55]。確かに彼らの証言の中には、そのような自己欺瞞に通じる点も含まれていたかもしれない。けれども私たちは、単なる自己正当化であり無効だと断罪するよりも、呻くようにして発せられた言葉に謙虚に耳を傾け、人間が持つ予想外の潜在能力を理解するべきだろう。

Ⅳ　人間学的考察

私たちは特に意識せずとも、また明確に言葉で表現できなくても、「人間とはこのようなものだ」、「人間ならそんなことはしない」というイメージを抱いている。人間として認めうる一定の許容範囲を設定しているのである。そしてその枠からはみ出す人を、「人で

なし」、「人非人」、「悪魔」、「野獣」とみなす。換言すれば、自分が作り上げた許容範囲を絶対視し、それを基準にして現実の人間を裁いているわけである。しかしこうした人間の枠組みは一種の仮説でしかなく、必ずしも正しいとは限らない。私たちは通常、実際以上に人間を自立的な存在だと想定し、人間の道徳性を過大評価している。だからこそ、人間の行動が周囲の状況に大きく左右されてしまうことを実証したミルグラムやジンバードウの実験に、大きな衝撃を受けるのである[56]。どんな環境にあっても毅然として矜持を保ちたい、優しさや思いやりを失いたくないと願うことは、賞賛されてしかるべきだろう。だがそのような麗しい理想に幻惑されて、人間の現実から目を逸らしてはならない。

そもそもナチの収容所自体、非体験者の想像を絶する世界である上に、特別作業班の場合はさらに輪をかけて、非日常の極みのような状況が取り巻いていた。かつて特別作業班に属していたヤーコブ・ジルバーバークは、焼却炉の前で積み上げられた死体を尻目に配給のパンを貪り食べたという。彼はその様子を震え声で語りながら、「人間がどれほどのことに耐えられるか、生きるためにどこまでできるか、私が話しても誰も信じてくれないでしょう」[57]と嘆息をもらしている。私たちが信じようとしないのは、現実否認に他ならない。普段の日常生活ではとてもできないだろう、とても耐えられないだろうと思い込んでいるような行為でも、時と場合によってはやってしまえるのが人間なのである。もちろんそれは悪行に限らず、善行にも当てはまる。

かつて広島の人々も、一瞬にして膨大な死体との対応を迫られた。大田洋子の『屍の街』は、まだ原爆症による死者が出る前の8月25日における死者数として、「男　21125名、女21277名、性別不明3753名、計　46175名」[58]という数字を挙げ、当時の様子を生々しく描いている。「横川駅の手前には海軍病院の救護所ができていて、負傷者の群がその天幕を埋めていたが、丁度その前、瓦礫の山の上に、男や女や、老人やそして子供や赤ん坊の死体が、猫の死体ででもあるかのようにかためて積んであった。どんなに死体に見馴れていても、その死体の山こそは眼をそむけないではいられなかった。天幕もなく死体収容所と書いた板切が立っているだけで、かっと光る真夏の太陽に照らし出された死体の丘には、裸の四肢を醜くひらいて空を睨むように死んでいた太った若い女もあった。どの死体も腫れ太って、金仏の肌のように真黒に焼けている」[59]。それまで普通の死体すら触ったことがなかったのに、こうした無残な屍を「死体収容所」にまで運んできた人、またこれから火葬にする人が、数多くいたのである。インガ・クレンディネンは特別作業班について、「私自身としては、彼らの精神の逞しさを賞賛したいように思う。順応性は人間の徳の一つであり、それ独自の勇気を要するからである」と語っている[60]。広島の人々も、勇気をもって人類史上初の惨禍に順応していったのだろう。

アウシュヴィッツは人間の実験場とも考えられる。被験者を囚人と看守に分けるジンバードウの実験は、看守が余りに過酷な扱いを囚人にし始めたので、途中で中断せざるを得なくなった。そのような配慮がなければ、極限的状況で人間が肉体的、身体的にどうなるか、何を仕出かすかを示してくれたのが、アウシュヴィッツである。その貴重な記録を、私たちがすでに持っている人間観で曇らせずに読み取る努力が必要とされているのである。

注

1）ラウル・ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅（下巻）』（望田・原田・井上訳）、柏書房、1997年、170ページ。
2）E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, *Zeugen aus der Auschwitz*, zu Klampen, 2002,S.41,77.
3）Miklos Nyiszli, *Auschwitz*, Arcade Publishing,1993,p.52f.
4）E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, ibid. , S.175.
5）ibid. , S.179.
6）Hermann Langbein, *Menschen in Auschwitz*, Europaverlag,1995, S.286.
7）ibid. , S.287.
8）E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, ibid. , S.7.
9）Hermann Langbein, ibid. , S.297.
10）Miklos Nyiszli, ibid. , p.44.
11）ibid. ,p.75f.
12）Hermann Langbein, ibid. , S.289.
13）E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, ibid. , S.75.
14）ibid. , S.214.
15）ibid. , S.108.
16）Hermann Langbein, ibid. , S.292f.
17）E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, ibid. , S.152.
18）ibid. ,S.210.
19）ibid. ,S.310.
20）ibid. ,S.7.
21）Hermann Langbein, ibid. , S.288f.
22）ibid. , S.285.
23）ibid. , S.291.
24）ibid. , S.290.
25）ルドルフ・ヘス、『アウシュヴィッツ収容所』（片岡啓治訳）、講談社、1999年、304ページ。
26）Miklos Nyiszli, ibid. , p.71.
27）ルドルフ・ヘス、前掲書、306ページ。
28）ルドルフ・ヘス、前掲書、305ページ。
29）スタンレー・ミルグラム、『服従の心理』（岸田秀訳）、河出書房新社、1995年。
30）Miklos Nyiszli, ibid. , p.xv.
31）ibid. , p.xvi.
32）ibid. , p.35.
33）Ulrich Völklein, *Josef Mengele ——Der Arzt von Auschwtz*, Steidl Verlag 2000,S.151.
34）Miklos Nyiszli, ibid. , p.xviif.
35）Viktor E. Frankl, *…trozdem Ja zum Leben sagen*, Deutscher Taschenbuch Verlag,S.109.
36）Miklos Nyiszli, ibid. , p.144.
37）ibid. , p.161.
38）ibid. , p.161.
39）プリーモ・レーヴィ、『アウシュヴィッツは終わらない』（竹山博英訳）、朝日新聞社、1990年、232ページ。
40）プリーモ・レーヴィ、『溺れるものと救われるもの』（竹山博英訳）、朝日新聞社、2000年、61ページ。

41) 前掲書、63ページ。
42) 前掲書、61ページ。
43) 前掲書、57ページ。
44) 前掲書、56ページ。
45) 前掲書、55ページ。
46) 前掲書、56ページ。
47) Miklos Nyiszli, ibid. , p.68.
48) 前掲書、56ページ。
49) 前掲書、56ページ。
50) *Reading the Holocaust*, Cambridge University Press, 2002, p.73.
51) プリーモ・レーヴィ、『溺れるものと救われるもの』、60ページ。
52) E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, ibid.S.199.
53) ibid. , S.208f.
54) Hermann Langbein, ibid. , S.289f.
55) プリーモ・レーヴィ、『溺れるものと救われるもの』、53-4ページ。
56) これらの社会心理学的実験とホロコーストの関連については、次の論文を参照。J.P.Sabini and M.Silver, Destroying the Innocent with a Clear Conscience:A Sociopsychology of the Holocaust, in: J.E.Dimsdale(ed.), *Survivors, Victims, and Perpetrators*, Taylor and Francis , 1980.
57) E.Friedler,B.Siebert,A.Kilian, ibid.S.313f.
58) 大田洋子、『屍の街』、講談社、1995年、35ページ。
59) 前掲書、117ページ。
60) Inga Clendinnen, ibid. , p.78.